

平成 25 年度第 2 回（通算第 55 回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

「学生によるフィールドワークと中山間地域の活性化」

教員世話人 安溪遊地 井竿富雄 進藤優子

院生世話人 呉暁良 中村彩佳 岡村理恵 張超超

日時 平成 25 年 5 月 22 日（水曜日）16 時 10 分より

場所 国際文化学部棟 C-12 教室

主催 大学院国際文化学研究科

発表者 安野早己 国際文化学研究科 教授

タイトル 「学生によるフィールドワークと中山間地域の活性化」

要旨

中国山脈の西の端に位置する山口県には、いわゆる中山間地域が広がっている。中山間地域という語が初めて用いられたのが 1990 年の農林統計であるということが意外に思えるほど、この地域は、低迷する農林業、人口の流出や高齢化、また環境の保全という観点から注目を集めてきた。さらに、90 年代の地方分権改革の流れの中で、都市部との合併が推進されてきた。

合併後の地域づくりに、住民の方々のみならず、外部からの視点を取り入れてはと、県の中山間地域活性化推進室では「学生によるフィールドワークを通しての地域活性化」という事業を展開されてきた。海外でのフィールドワーク経験をいかせればと、私がこの事業を引き受けたのは平成 21 年から平成 23 年の 3 年間である。萩市小川地区（旧田万川町）に 2 年、山口市地福（旧阿東町）に 1 年、学生とともに通った。それぞれの活動報告はすでに県へ提出している。

本報告では、この事業で私が学生たちとともに直面した困難や課題を検討する。まず、事業主である山口県、受け入れ側である「ふるさとづくり協議会」もしくは「地域づくり協議会」、大学ひいては学生という 3 者間には、協同のみならず、不協和も多い。また地域活性化の主体は住民であるはずだが、ともすれば学生は提案した事業を自分自身で実行する破目になる。学生が地域で活性化に関わることの難しさを浮き彫りにしてみたい。

※終了後 18 時から Yucca で、第二部として自由なトークを展開できる場（山口国際文化学 SALON）を準備しております（有料）。こちらも皆様の積極的なご参加をお願いいたします。